

夢の中の神様

。ときめきリーフノベル

幸運と不運

文・高安義郎
絵・芝 章一

学生の良太はバスを待っていた。そこへ枯れ葉が一枚降ってきた。何気なしに目で追うと、足元に千円札が落ちているのを見つけた。辺りを見回したが誰もいない。良太は思わずかがみ込んで拾い、「今日はついてる」と呟いた。

大学の学食では奮発して九百円のランチを食べることにした。拾った千円札を出すと、それはなんと子供銀行と書かれた玩具のお金だった。

「なんだ、ついてねえなあ」

独り言を言いながら三時過ぎ頃アパートに帰ると鍵がなかった。胸のポケットに入れて出たつもりだがなくしたらしい。仕方なく階下の管理人の所に行くと、夕方まで留守だという貼り紙があつた。仕方なく近くの公園で暇をつぶすことにした。

「ついてねえなあ」

ぼやきながら木陰のベンチに座り居眠りを始めた。

居眠りの中に神様が現れた。良太の夢によく出てくる神様だ。

「ついてないって、何がくつついてないんだい？」

神様が聞いた。

「運がさ」

「ウンてくつついてた方がいいのかい」「何言つてんの神様は運も知らないの」「ウンというからさ俺、てつきり便所で…」

「やめて、そんな汚い冗談」

「だつて俺、本当にウンて何なのか知らないし」

「運てのはね、幸運とか不運のことで、偶然巡り会うものなんだよ」

「そうか、良太と美佐が巡り会つたようなものか。それで美佐に会つたのは幸運なの？不運なの？」

聞かれて良太はすかさず、「幸運に決まってるさ」

と言つた。言つた後で、美佐が親しくしているアヤノに近づく為にまず馬を射よのつもりで美佐に近づいたことを思い出した。それが今では美佐が恋人になつていただ。その意味ではことによると不運なのかも知れないと思つた。そこで良太は、

「不運を幸運に変えるのが人間の知恵つてものさ」と言つた。

「おや、たまには良いこと言うじゃないか。それじゃ良太は自分が生まれたことを幸運に変えようとしているんだね」

良太は少しむつとし、「生まれたことが不運だつて言つていいみたいに聞こえるけど」

「おや不運じゃないのかい」「どうして不運なのさ」

「だつて考えてごらんよ。生き物は生きるために、皆大変な思いをしてるじゃないか。昆虫なんかは生まれた卵の一%位しか成虫になれないんだぜ。ライオンの子だつて大人になれるのは三割で言うし、人間だつて最近やつと生存率が高まつたけど、奈良時代とか平安時代では赤ん坊は四割も生き延びられなかつたんだ。特に男の子は二割だつたらしい」

「それ本当なの？」

「俺嘘つき神だけど、データについては嘘は言わない主義だから」

「何かあやしいなあ。まあいいや。現代ではほとんどの子が七歳以上になれるのはやはり医療が進んだせいだね」

「論点が違うだろ。ようは生きることは大変なんだつてことを話してるんだ。つまり死との戦いに勝つて生き延びられたことが幸運なんだよ。そんな不安と常に戦わなければならぬんだから生まれることは不運じゃないのかつてことさ」

良太はなるほどと思った。神様は続けた。

「もしさ、生まれ出るか出ないかつて聞かれたら良太は何て答える」

良太は考え込んでしまつた。すると神様はいたずらっぽく笑いながら、「そんなに真剣に考えるなよ。生まれるつてことは、選択できないことなんだよ。それに生まれなければ幸運も運もないじゃないか」

「神様の話は大げさだよ。僕は今日拾つたお金が玩具だつたこととか、鍵をなくしたことなどがつかりしていいだけだよ」

「そうだな。良太の運不運は幸不幸の範疇外だな。そもそも今日のことは、お前がちょっと注意すればどうてことないことじやん。それをついているとかいないとか言うのは甘えだよ。赤子の甘え。小犬の無駄吠えと一緒だ。じやあな」

神様は消えた。

良太は涼風に煽られて目を覚ますと歩き出した。途中で今朝玩具の千円札を拾つたバス停に来ると立ち止まり、ここにあつたんだよなあ。そう思いながら目を落とすと、何とそこには部屋の鍵が落ちていたのだった。

